性靈集 卷第二

特別
13
3519
2

特
門
3519
巻 2

懐古沙伽楊

同孫

第一鄙の入乃

若松の池源の結掛の桜は枝ばかりで落る

雷僧の気絶屋敷世子分の

不持の武術なりとて敬ぎ仕

二之巻

昭和二十九年七月九日購求

第二　津国蛙合戦

蓑中より蝶と成て荘子が大風にたとへを
腰より外ちる蛙蓑中に二世界を書し
玉はゝきのを封角くわんなどの義

第三　松浦の大蛇

浦潟を高ぐ背性に通ひ入る小川乃
夜物語九百年に業を教授の神に参
度の帝に成りし時ちゝわ富士の穴

鄙の入乃

洛陽東山わらぐ峯ひとつ谷海乃馬町乃東に
みちとして豊国の社造営の時今の三條の東へうつさるゝ
其馬町ふれし着ふりてふるゝ池といふ今よりの代畑よ
若ちんどうりてそ京洛をうひ家ふ一宮うのこと表雲備西
国寺して信ひけるゞ元ろ博学多才信わく人弘人を
時の帝後ちふ段の院源く信ゞ内厩ふれわく
法なゞ国一京れしけ備西国兵女の性のひゞくそる代
畑ひ又陰ゞ従の乃を志光一国紅梅又の心を云て女を
いまめ女のをうう物をとて光前わ洛ふ若ふひわう

此僧乞食なりしかど詞はげしかりしかばそれとて人呼んで当僧正と
よびけるが或時沖縄の女連あまりさはがしく女
人の身ではづかしきことども後世の話を物語するとて
まこと人の命ほどはかなきものはなし人をかくのごとくのまことを
愛執の心をはなれずやかゝる事の僧正にこそ念珠の
どうしてそのやうに禅利ある中に南方にて女房二十余
此日比聖人の膳を取揃ての人なるが中にも主人の妾隣の種
まで生れながら我がうちむさくのまことのよし只だたるを
たちまちねぶらせまいらせん我に三百の賊ありしか此の僧正を
落かさん人奥より出でむさまで三百をけせんと落しつとて
東のひをそへ網かけ金札を持て羅生門へゆく中にて是千疋
池のほとりの汝が身にや池の奥へ行けるほどに

下人を踊ろして尾をきりて僧正はやくとぞゆくさきをまつ
ぬるゝまれでそでぬぐひしなせ姿を見れしかど若尾を
まで三八のおがみむさうまで色は迷ひ笑顔にていふまでぞ
海殺生積むの報をして詞をするも我尾ぞ我すなはち
ちゝ兄弟なるが母生まれしこの命を男も貧に乞て償
まかせて池にまかせてあるに願つて求ん為にまかせて
小を殺して大を生かしなる我を憐こと我とぞ此心にて
たゞ人間はかなくしうけまへ僧正も現のごとく成る
おん浮世より願ひを償ふとも詞を止よ極大海我よ
なきかせて老母も悲しまづ我を孝行かなと魚ぞ結付
ゑぐりぬれちぐさ御仕舞人ん細きし百の心を延
猿猴仕されば僧正も哀と勇気よく我を此世へ

是猶のごとくあさましく凡夫の宗旨を見るも仏も問切わたして見えんとふ
かく愛し夜のふすまに添臥して戯れをなせば小性つゞきをゑん
ごんふかまへて情あらば能ありて遠山を賤しき我身を穢し
きるうちなへを減じて寝間を穢し中事を剃髪して沙弥のも
自ら下されけしと尻の出るとれば傳をうせる在れ浄の
身をなりてもなげ捨てまでや小性かなきさを以ていやくらふいやすれ
人の今こそ角の女の男の流ろ義をとおもひなげ秋風の空の
まふく追出されやせんのとものをもふれだ佛祖をけてかじと
聲ひてふせきまで思すつうみれど需のちかくひくらてとめ
本の葉の梟をこそかぐ風情ある時家誠は女すそけ様子
ありて男の姿まで君まかせけれどあまたもけ事をたく隠し
ぬれたにれ余さにてがかさんといふ傳正肝をつぶし起出ん

ずる禊ひのをされば佛祖に見捨られまゐらせんとや
猶のよやしとらいでの事ありあけて抱とめきせれば
ひまうれせん今うきすまはさ母とらへるのはさまされ
そとそなれる抱ときすぐ鬢もみだれてあひ見たる三日を過
けるうちおうつの識へ大内の去年られたる京里まで若し
三日の縁をつゞかせてある内よりいざやむとて名残
おしくハ行くとれ暇まきも祓の情けよろしく思ひ
とけきのびの事をおもへとこれのびれの今をひなし
とらうまでひれもささてこそ身もいる傳正奥へ送り
儀ところ事をかして女まぎれ折々姿を見ても南門にまた
ずめた男人の擬らずる事のこなれて御りあれだ気分くかれ
よりて風日過りる事門にれまた立一首の哥に

龍宮城
閼伽
閼伽

かい帳

かくてちかうハ雲の上へまいりあられぬ身のゆくへ定めぬ
備中守ハ分てまいりとん付給ふて二八きよ春まいりゆく
みなたく近きよりさハらハきこえかりし分の御さんをうんとく
紀の海の宝を掛るありてひで後さくへききいとせんと云よ
にむかへの岩きも鬼神として高麻と杉の木に結び付
一つの鬼剣をもちて貴人のを海三千里の海流くふく貴きさきを
落せし罪今報へく人の根をもと深きくされんにすい備中
遠くをうけまいり一手と蓄の罪とわれをもけうさん給てんと
川へざぶと入けるにおやのてんの発て汲とあひとりし流れ
けるえようやを射つとうをれけきをしかたまに流まく
て大海の底へしつみゆくことかぎりなき事ありて死なでも生き
死どのれなどもゆへんもて水底へしつめれけれバ手さえゆく中々付

て眼を開きみれバ是ひとつの世界にて民屋いら
かをならべしこハ義とこそあるべしとけバ家を
親父の世界の様をとくへ王宮の内まて御覧へ法人へ誘
ありけるかくのごとく貴賤群集するなりと答ふ不審あるも
あへがたき時節にて続とさかへる縁地をいへる楼門
内へ入て宮殿廊閣七宝荘厳のまへ程合須の姿
瑪瑙のきざはし月にかかやき歌舞音楽殿内に響き織や
宝玉の珠玉瑠璃のやすらへ一つの殿にかぎりの御宝
目もあやなるさまは神代の昔とてもあるまじ宗の縁に
ひめ君の親父へ参りて時のまへをしらめいての妻摺神宮
后よりさし安徳天皇の御遊びの御車まで供奉にあつかる
又別殿よりは三千丈の五條有て公卿殿上の衆

勤番でありしが御寳なるやと見れば是ぞ面向不背の
玉とかや佛像のうちにさまざまの仏ひかへ奉るは此玉ハ
唐土より渡りし時龍宮にとられしを淡海公讃岐の海士の女を
契りをこめ給ひしより海士の漁にてとりかへされけれど今猶
おはりはぞやゝ此宝を竜王我ものにせんとて龍王の娘を以て是を
向ふのみそかに語りて竹せん宝ハ後の代まで伝へられし寳竜よ
り子ず海士の漁の日本記の允恭帝十四年淡路の都に獺の時海底に
大蛇ありて玉の光くらし海中に入り御獺の婦となれ共千尋
の海底は作りし事もかなはざりしにあまの子孫を
代々まもりて我ぞ竜宮へ行ける事とて一人のあまの縁を
継ぐ上は唐の宝を作り給ふ大織冠と六代の奥旨
鎌足のへいまだ御子不比等の建立ありてあれども

作りたる事なりければ御寳の玉とぞ奉る。
名あるべき秋の夜空の御幸に聞きし心の胸中に思ひける
我の玉なり龍宮を龍女のためにようやく八尋の一つとを得る
夜さんとする海まつりとて中々是と龍女とあるべき劍
美女なる高宗の后帝八后の龍女ようやくぞ是遥なる日本へ
宮へと送りしとぞ其后よりそなたの玉なりければ是ぞ
なれぞそなたの万戸将軍に仰せて三種の因縁を知るべし
筑紫ぞ二色の渡して万戸を心を悟りて語れ日本に
彼らも又万々の智恵をもむかさず
事ぞとらむひてちからの神も龍女に胸の是でとむかれぬ
和りてふさわしき状でつかさる是かその趣をむかざる
のあるなりされた日本に龍宮の玉の万戸へたゞのみれるといふハ

きん寺うの和尚の弟子と契りて夫婦となる
廣まりて法せる人海のめんくの玉なりかくの
ごとくかの玉くをむすびよわるをもつて家の義経の国衡
そかの文殊の大将軍を船の玉と美女のためようむをも
分をたりやする事かぞるよいと海を抑世とよ名をた
即とて高麻とい人新女よりむをとられ今あく海をたり
見をかの玉毋をむすびたりうされ一度出家と成くるりし流をと
婦殺まくる長板ふんて二てび海よりへ一ぬ中をよ
ゆうむをわしため仏法を彼せよと為ひて一つの舎利を
給ひ見に菅秋をるう仏る家の伽舎利なり今新まの仁
先つくく妙よわくへのへといのあちくへ新北のへへて北ちれ
なりあるくくこ二度頂載しそこを立うけるふ食をぶれば

いとく空腹なりぬいうせんくを食わくぶる
天のたなみなりと二者よ付るふ行ゆん個よかう痛とける
程よ。動味うるくはんとすれ。出ぶ時。縄わてこゆ小見へ
こですんとすれどのんど痛うく程よ縄よまくふひわがぬひを
うくぬ海こよ鎖所の紅の中うぞわぐうけう鎖所に紅び大
きなる鯨こそ掛りられ見くの住合と思ひて紅と星へ対
てうんとするふ中くわぐれわだれ人をちひたて。側へ
おへさかくは。ぬ。ふくわ川ゆうは鯨をぐれて大きさられ。
服をうりて塩ちどせんと指て。たくさ殺さんとする時に
鯨俗よ目鼻へぞ見をを生じ。ひる内よ大の法所と成けう。
人くおどろくすへ化物よと続をふく寄んとするふ。もへの僧
通り会ふ。おまうふ面倒よ人くと常くとでめ。変化のそべ

ちよく当山は是れぞ同前にて奥が法師は成るぞとそれ
僧正殿をはじめ右の次第をこまごまと語り。それがし命を
助けて得さるをかまへは僧たちを招き。古より雷僧正をも
頼みかけつ。かくて寺僧の高名を知りたるのぞくおもひしを
仏法をさけたまふべきは。吾の今すまも右の事を取り。命を救ひ
ましませば衆も見と一刀をのがれ。仏舎利と出し。縁起をを
語りてさび泳ぐるを。我ども海の底へ若づくろうとも。
かまずしも事なし。せめて我等は皆くいてぞ此者へとわればば
は僧をとらゑめ浦のうのたせんべいそのんのかぎと我も
くもいてぞ天竺の事も一人の命ぞ。ねを採われども。其の
理なるといふもいふ葛る寿りとやうさぬか

津国蛙合戦

摂津国名越の東岳寺に。伝誉といへる上人ありける。
此寺の庭に池あり。ふるとしもぬ蛙のあまた住けるを上人愛をも
わかまゝに鶴々の餘りを与へ食ひけるまで。あまりなくさてたりけるが。
ある時も早稲とる遠山小野にはさへの物の越て蛙の長柄
の沼のとよまれてか。おや気をわかり隣り蛙が来る大月夜
さびしき鄙の寺に住ひ。枕の仲ばかりとく目をせ次の年を
まろねわ音に。武士をへ上人の前へ出。我は見しれわれを
下されし庭の蛙なり。ねも当国名の沼の蛙合戦ありつ。
大蛇ものせん伝ふれはくもえかに加勢をい傭ひくれ。此の今夜おち立ぬ。
若武者とや。ひきてもいてさばえて討死仕るべし。彼は観見

法界一佛成道と義ひ〳〵草木國土成佛の法をひらけばなどや
のまひけん寿ん〳〵の庭よりすまひて身物尚法のかぎり
成せ〳〵ば地獄よりの事。牧母為ゆるなり。ゆゑに冷れば十念を
受く〳〵。往生の土産なりと。同じとなげ。やけ。若輩つぎ
ちぶ〳〵。不仮の事にはいへ。会はは。教化〳〵。十念と授影をなり。
けるぶ。銀うの不思議〳〵ちり〳〵ひて。れ〳〵えひろるふ。実と
いの法よ。わ万丈の蛙あ方を。辛ろれ河の聲天よひぐさ法よ。
るき。蛙ちぐ〳〵。礼を軍いれて。数しけ。抑ばと人〳〵。拝ま国
る法所をれで。蛙の毒を。実るかを。けるや有りん。東の方ろ
者を。ある蛙とび出名。祭りる。見。為。蛙馬の法よ。寿とふる
がまとは我事〳〵。往着保元辛酉の比。源会頼の三男が家ろ
ふとんで。蛙けとる。相撲の。ほ。ま。を。ば。〳〵。我とおろん

者わ〳〵で出わ〳〵やとそ。浮ひけ。西の方ゑ。ま。ま。蛙二足三足入〳〵
出ろん。ば。がま。千事をせ。を。得ろ。やかこと。行の者。ま。く。食
伏〳〵。歌ろ。ば。ま。て。て。を。ろ。け。西の方ろ。ま。る。色
ま。る。蛙とび出。拝。ま。ば。て。者。ま。ま。国。ば。ま。ま。ば。
ば。ば。の。伏。ひ。ま。大。ろ。ひ。す。の。ま。ろ。の。く。や。か。ま。て。ま。ん。
ろ。ひ。ろ。早。く。蛙。ち。ぐ。ひ。ず。と。細。ま。で。勝。負。入。ば。ば。ば。ば。が。大。ひ。
力。や。強。ろ。ん。が。ま。つ。ま。や。ま。ろ。ん。ま。ま。下。ま。る。ま。と。東
の方。ま。大。勝。ん。け。集。ま。ま。が。ま。千。対。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。
和。は。水。伏。蛙。二。足。ま。ま。拝。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
の。男。ま。と。ま。け。て。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
と。ま。ひ。と。ま。二。人。の。男。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

頭をかへ。今一人は尾の方でおれやまいらずとて踏ばりしが。腹はむなしく
縋ひて住まひぬ。我等が先げて津の国生田の川の水底のなかうち
とうとう川の水に投死したりと。二人の男は浮ぶ水底に沈みこくずと
成りしが。むざんや。ちゑあ二人の魂が蛙と生れ。その恨みは絶えずとあらく。
今かくのごとく三ヶの月ごとに争ひをなせりといへども。右の方ちからの勝負
せんとて大勢ひけるは。八百二萬三千よ兵を掛けて。地勢ひは鳥にあまれ。
東のかたぜひ乱れ立ちて。今既に屋をまして刀を抜いて是はまだ戦ひを携へたる西の勢。
家のくるしみ群がつて追ひかけ。けれども時ひもの、ね。壊るる時ともぞおそれげな
ける。敵の味方ろうまぎれと見しために。居る者は近さる大勢いかゞ
くへし。敵は中に入りてあふ。包でぞ責めかゝりしが。さしも勇み立つ勢。
はくもよのせられて。汗をながらで居たりけるが。むしかは大きにわけだ。
手柄をかんせんと。同じ時で。五三五三よ。しかくめと。今かくのごとく戦は武は

手負へとせむ。小高へおつかひは数度くはせて。火花よ成るくぞ
戦ひけるが。合戦をんめよおさり。ゆへ。我庭の蛙女の方もやくれて
りん。藤井よ。や掛りかへ去るまでも。淡まさることありしが小
高き死せのうよ大蛙大手上我は先立つ。毛髪の長若い眼等は
とむ。蛙よりなれ。年来よりかれ。蛇と天勢を捨てしめぞ。て、ほどに篠原をさし
我ることいとふ若き時分よりそ、せむあへども。よかぞ。ほどの方々
あつて。川の畔に流れの入江のわだらさい坂田の浜の柄だし。南方
より浮の淡のおしぶ主坂辺の浪あるの淡の三方に。其池
の積読で外我方の蛙をおっしてのあつて。東の陣をし
紅井の水の流れ出て。井の前にある。其の流れが山の下に
入江のみ死ぬ。堪ぬあらず。とのもれ。柳の小楯を抜きして津の国
中の蛙を入れ。言へ戦ひしが。たとへば。降りかけ。深きちから集めし。何よ

たけしと思ひ。老翁一人の杖つく前よりしが。わが浅ましき戦ひ武
いでゝ苦患と艱難と勝ちる瓢箪を出し。見いくと打ず。
ふしぎや数万の蛙を一ツも残らず。中へ飛入くりれば。歌も味
方をわすれ。吹く松風ぞろぞ音きゝしが。ど人の館の事に。おもひく。
老人の袖をひいて。称はいふ。さる人今すでにかゝるこゝろのありしかも。今ぞ翁
答ていはく。我は南國武庫山に住む隠者なり。唐土にては東方朔と
仙人はつとりのちの春ぞ。蛙大海を知らぬ。今はなんぞ今を
鬘のおよわ。おど處とて田畑のらかひを。
共に精にありて。水に生じて水つを。おもしき。呉と嬀乱我
係をあるまひ。後に雄のらまさに。落つる事。下の嫦嫉妬の
根を見るは。是人の生ぞ。思ひ是よ同じ世。死の大事と年ふる。ならくへんを
そつまし。猶さへ衰へて。むさ河の人の姉で。よきちまかんぞ蛙の

合戦の長きのみんやかんぢが雨後も小さき仏なる出る荊中に
山家わねにとこぞんよくしひまさんの内との色なる
猪はいつぞろりとかんろにちさいはきむさんの内に三千太千世界
わりなきも今で富士の山を元手かさ。○をさら山ひらねこひき湖と
千も合せる泉水の。日本とおなしこさもまひら猪はあへて。
彼姓のおなわる玉江の浪八一粒の粟のごとし。実や荘子が大
園のたぐへと見えるんと。わりに金小僧。柔りやく何の用に志玉
江寺杯をはかる状がよく聞しことぞ。さき何をやと記したり
一　筆啓上仕候。例の庭前の吉子が家へ役に候一家
へ進上仕候。君貴方逢来此の頃よ。今朝まで蛙
合戦ありて。八つ時より縦かに今ハもはや足もなく静まり
申し候。切り取のあらばし何ともかかり法人の死を兄出仕り候の沢よ末

九つより夜は頃と

正月十五日

慈眼寺大上人

系

玉江寺

松浦山の大蛇

北狄の千年の裘を知りて後を驗さ。南外の不定の郷と知
らずて寿となる事にはあらじ。千歳も猶衰のへだし。
かけろふの夕を待ず夏の蝉の春秋を知らぬもあれど
長生はいとも難ければ今も千年は定まれる寒の飯の出
来ぬものなりと見えぬ男なりの何の子の香で極ぶ
根本の松浦世界の海肥前の國ちよせ塚の邊にて巖寄

鴨長明が方丈記に風流の事をもしたる書の奥にて
是ひ野を越て川を渡りて松浦山にてつまれ城や忠房親王の墓
のつぎきは煙はたえみなひし清の色に鐵上天源を
作る方でくまなたちに都まで出るに松浦山の頂より
時ぞ月二ツよりて眼が光りて鳴なる事と思ひのごとく
見れば山と九九八大蛇の紅の舌を出し目より光一文の眼よ
て我に香を嫌なりし大きなる事なりしに背をたて
何の音もなく一天かきくもり雷電おびたゞしく雲を起して蛇の姿
へ今ぞされ其りを我つ打ちに火の中にて
挑燈の火を持て其ちに今にて心の勝に
ちるまでもなく或ハひろき香に魔たがれるもあり
るぐらに足をも掬ひもある所に茂みにて見なる

むべ実や安達が原の鬼のいはやにて。人のかばね積るといひし断ぞ
あらめ。寺中に只今呑れぬるとて天下聴聞たぐひなき侍といふ人
ありけるが鶺鴒を見て淀くやけるは拙へぞ共もち蛇の腹に呑れ
たりや我も今ゆきて先よりのむれて腹へ入しと只今ここに鬼の身ども
人出羽の大山そのむれにてまた在る人信濃の住人とかく物語よ
て呑れぬるは今さへ物語しけるか何とぞ我よくまもらえども
迚もの命今の浮世を捨たんと頼みしほどに
瑞鳥は安き迚も寂寞と落るかれども大蛇の腹に行らん
事よそ腸もしけるもひざく家にて死なんとか一腰握るゆゑに
幸なれば蛇の後にて実つらぬきや日を見るのみにて死なん
とて命をかけずつ死をもって蛇の腹より穴を通りてぞ見
むかうして二人刀を抜しつ同じく大蛇の後をたつけるまでに大蛇

わがうちころひけるが人のみか腹の中にあれども亡ぬさ見くだしも人の稜をまぼる
の虫の腹とてある蛇根をせむるありて我かつみ何事か行と見えし
松風の吹ごとくざわくとゆれてある穴よりのぼりて逢さまよなり
あるひは飛をわたり毛つけし稜よ雑風よあらう船のごとくおちくへ
こけころくすろびかろを蛇の背の松の木のやうなるとのままにて
こら命君の噛思さあつ丁目くるあきて二人かどうへんくりとしけるが。
大事のことゝ祈りてやあらん。大蛇もまさぐりかくのまゝにて頭よりはる
しゃ茂りけれどすこし静まりてそのむし穴より風ふくて悪気をも
お八すぐに湧かるるなは二人ともに続て枝八住なかさ住ゐつゝくも大蛇
の腹を横裂にわけ逆なんと去りぬる腰たかき息されけるの
侍は空しく命終りけり。瑞鳥は大力なるとて人われ乗りて窓角
して遠吹く穴より出んと仕りけるが坐しや急ぎもまぎれぬ大海の底にぞ。

小船の者ども
姜女と
ろう人
海うと
主城へ
つれ
ゆく

そのあけの海を見るに、あるいは黒ずみ、定まる命のかくまで仕合
てのちらざる海くたるべし。大海のとよみて大蛇と表す。庵のうく
づと成るべきを見れば、そのいとまぞ、宮殿の勤せんと、一の観音の
御名をとなへけるを、たゞしへでは何蘭陀、紅毛、ゴロウ合せる者
大和二三艘あつて、大きなる船を造りて、彼大蛇をとらんとて、修験
者をもて、鯨をとめ、ごとく、面々下のぼりなどにて、せく。
大網をとりつくろふ、様々と大勢立かさなりつくろふ切
れたるを、そこ人々の見たる目、長八人ばかりあつて
あるを、たゞくなく、怒りたる。海をつ蛇の後ろ、ちべ出
大勢の着長かりひとり、ゆゑ、強ごと、こく、居ようけ。
海を、ひざまでにて、礼をとのべ、次第を、後れども、海
只ちんちんと、居けるを、大勢立て、海を縄そつる。

をあけの中、ちる、あのせて、何ぼたの、連れ、ぐそ、國の主、
しき大蛇、そつ、ふけ。宮殿、樓閣、まれ、表、くく、大臣
官人、例と、海、長、けるを、奏、人、あげ、き、若一人、ものごとの、
かこまろ、海の中、上、るに、大王、聖、義、けるを、国、
けて、ひ、海を、見、こと、を、見、ば、大王、民、
海の、ぞ、ひ、ま、ぐ、ま、ぞ、大蛇、まのまれ、ま、表、
その、財、友、を、ぞ、作、ぞ、ぞ、海、ぞ、小、物、言、
日、ぞ、と、表、事、拾、万、里、海、や、日、本、
ゐ、ぞ、山、國、の、人、民、邪、見、ぞ、と、ぞ、の、公、
わ、ぞ、ぞ、我、人、民、を、極、苦、ぞ、ぞ、ぞ、
事、ぞ、千、百、年、の、日、霜、と、屋、ぞ、ぞ、ぞ、
神、ぞ、とる、ぞ、新、那、ぞ、ぞ、国、ぞ、ぞ、ぞ、

なのむべし。且又此國の稲をけしまよ汲まべし。絶ても官女の
わざもぜられし其かゝる三人をでゆ下されけり。田かうそ絶は見へける
事ありて今の役をちりむめる御殿をむすり山海の珍味佳肴の
衣服のものよくやまれ三重の役をみ都乃をわてなきをおれ様に
だで是すぷやそるゝ是しまゝ麹し國への命。千年と埼るたれば。もぞぞく
氣力も當々べしよの作覧て茶飯記むしくも昔備あれば。本通
るさらに寺之金剛寺志に掛たの編魔都もなえず有理に縁も
なずきぎ頂谷に残まわがかもぞ。悔らくよ家をしゆきるまよ迚
ぞ。銅を晩もさの琵琶に足ゆとさもせよ春の花よなを白べし。
秋の月に園を遊し面見ゆるのとるそぞ。はまらく日を過しける
がよえを佐けち縁を社。其夜の上つるてび寄の縁の烟をも拝を
の室々を任びよるとびそかさよ一門の先祖を着て。今乃ゑ九百

年の月日をへたりけるに。時に大へ手より勅使ありて。かの白海げなる國へ引
の衣裳起き右の右郷居じがくらん倫をべしとなる今くは許通波
しまさく此所も倫吉所のびしは。そぞむと七ど勅使きびしく
重ればカてはならぬ。門に勝えも晩に蜂せ玄べし雲執路とせる。
周地の駒よお衆の一村の雲か宴あり。剣那の間に日本の境
見えける宮へ死くれ駒か生る雲に立よけれ。ゆるて先よけ。擬され
より居によ一ツの洞へわれたれば。むかしやあうけるやとゞかよ
任せてゆきまさく霊に出る宿や日の光りも所にゝとそはげき。
日本にそのあけほどで。なかちらくきおひて宮へ遊ぼませんとこ
くれたれど。数年の国にぞの人に完より出るかと兄合りくちゃで
右の人もん雅古浦将た申ぞで世の孫に有とも纏り縁へ立戒へ
九百年をすゞけり。往は今ゆくまたもやわしま。探気に夜知は

りのと遠く肥前の國へ下りて尋ねるに、[illegible]
きかのもの家内をのがれ今年代に行るとのまに、[illegible]
やんとのがれ家へ入れば、女房もまもりもなく、はまの所の
人くわのまう、[illegible]ちの人、[illegible]
いんで、女房よ来へとう有く、[illegible]
うやうく見まうてわの人の事ゝ[illegible]
に大勢わのまう居るをさされば、こゝのさの大蛇のまれくうせたるを
よしをぱつと見て命内ゝ宝りへこのもとびらの相時じや。
あらうしくまいれ

二ゝ巻終